



英語辞書学論考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南出, 康世 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011175

英語辞書学論考

南 出 康 世

は じ め に

Lexicography を R. R. K. Hartmann & F. C. Stork (eds.) *Dictionary of Language and Linguistics* (Applied Science, 1975) は ‘a branch of applied lexicology...’ と定義している。OED のような学術的辞書は「言語の正確な記述」を原則とするが、一般の辞書は、1 言語使用であれ 2 言語使用であれ、これに加えて「辞書使用者の検索能力・使用目的にあった記述」を前提とする。即ち言語学的に正確な情報を容易に検索できる形で提供する技術 (art) が必要である。上の定義で applied が用いられているのはこの意味であろう。一般的傾向として実際の辞書編集に携わっている人はこの意味を強調して「lexicography は科学 (science) でなく技術である」と主張する。生硬な言語理論をふりかざしても自分達の実践的技術がなければ辞書は辞書とはなりえないという自負の表れであろう。一方言語学関係者は上の定義のように applied lexicology ないしは applied linguistics の一部門であることを強調する。技術には言語学の知識 (シンタックス, 意味論, 音韻論, 語彙論, 語用論など。2 言語使用辞典編集の場合にはこれに加えて, 対照語彙論, 対照語用論などの知識) の裏付けが必要であり, 言語学的知識の裏付けの無い技術は無に等しいので, これも正当な主張である。結局両者はコインの両面であり, lexicography は科学と技術が相補関係をなす言語学の 1 部門 (語彙論) ということになる。さらに lexicography はこのような辞書の執筆・編集自体に関わる領域に加えて, 下記のような ‘meta-lexicography’ と称すべき領域をもカバーするに至っている (cf. Wiegand 1984)。

EFL 辞典の最近の傾向と問題点 (情報の圧縮化と検索の容易さ, 受信型

辞書から発信型辞書への転換など), 電算化コーパスと英語辞書の将来, 英語辞書の語義記述の比較論, 辞書指導と言語教育, 辞書利用者の実態・意識調査, 1 言語辞典と 2 言語使用辞典の比較, 記述主義と規範主義, 辞書の分類 (dictionary typology), 対照言語学と 2 言語使用辞典, 英米における辞書の系譜, New OED プロジェクトなど。

従来 lexicography の訳語として, 「辞書編集(法)」が与えられてきたが, これだと明らかに範囲が狭過ぎるので, 辞書に関わる全てのトピック一理論も技術も含めて一を扱う学問と言う意味で, すでに一部で用いられている「辞書学」という用語を本稿では用いることにする。

一般的に言って日本では英米で発行される辞書そのものに対して深い関心を払ってきたが, それは「辞書学的」関心とは言えない面があった。例えば, 松田裕 (1986) 『米語のインパクト』(大修館書店) は内外の辞書を(英)(米)のラベルの観点から比較検討しているが, RHD, ならびにこれを親版とする『小学館・ランダム』をラベル不備の例としてしばしば槍玉に上げている。これは一見奇妙である。RHD は Webster 3 と共に米国を代表する辞書であり, これを親版とする英和辞書が不正確な記述をしているはずがないと思われるからである。英国と米国の辞書の相違として, 前者はことば典的, 後者は百科事典的ということはよく知られているが, もう一つ, 日本ではよく知られていない相違に, 前者は国外消費型, 後者は国内消費型・世界英語型というのがある (cf. Algeo 1986)。即ち, 米国の辞書は EFL 話者も含めて米国内で米語を使って生活している人を基本的に対象としている。従って, 英国用法には比較的無関心・冷淡であり, 無標示ですますことが多い。また米国で米語を使って生活している人にある特定の語法が米国用法であるとわざわざ断る必要もないのでこれも無標示ですますことが多い。また対外的には米語=世界語という意識がある。一方英国の辞書は英語の自家本元であるという意識から英国・米国用法との差異に敏感であり, 国外の EFL/ESL 話者にもこの情報を伝えることを念頭に置いており, また世界のさまざまな英語のバリエーション (アメリカ英語とかカナダ英語など) のなかでも中核的位置を占める英語という意識から, ラベル提示には積極的である。この相違は Illson (1986d) の調査に

も明確に表れている。従って、『小学館・ランダム』は RHD に忠実であればあるほど EFL 辞典としての英和辞典の理想から後退していたことになる。もっとも、これに対して RHD の特色を残すためにあえて RHD に固執したという反論が出されるかもしれない。しかしいわゆる基本語が RHD の痕跡を残さないまでに日本人向きに書き改められている訳だから、これは反論として成立しないだろう。これはほんの 1 例にすぎないが、英和辞典の編集がもっと国際化して日本と英米のレクシコグラファーが提携する時代はそう遠くないと思われるので、そのための第一歩として英米では辞書をめぐってどのような議論・研究がなされて来、今現在なされているのか、もっと正確に把握しておく必要があるだろう。本稿の構成は次の通りである。

I. 英米の最近の辞書学の動向とその背景

II. 言語理論と英和辞典の語義記述

III. 英語辞書学の文献と解題

I. 英米の最近の辞書学の動向とその背景

ここ数年欧米ではちょっとした辞書学ブームである。1984年がジョンソン没後 200 周年、OED (第一分冊) 発行 100 周年に当って、いろいろな記念行事が行われ辞書に対する関心が高まったせいもあるがもちろんそればかりではない。これには様々な自然発生的・人為的要因が働いていると思われるが、そのいくつかを列挙すると、(1)電算化コーパスの普及により、データベースの作成・印刷行程に要する時間が著しく短縮され次々に新しい辞書が生まれてきたこと、(2) EFL 人口の増大により EFL 辞典の需要が高まり革新的なアイデアが実現されたこと、(3)学会活動が整備され、学会と出版社の提携により研究発表が議事録として次々出版されたこと、また、これに関連して、大学機関を通して専門職としてのレクシコグラファーを養成しようとする機運が高まっていること、などを指摘できる。以下(1)~(3)をもう少し詳しく検討してみよう。

(1) 辞書と電算化コーパス

辞書の基礎データとしてつぎの四つが考えられる。

(1)先行辞書 (2)母国語話者としての内省と直観 (3)インフォーマント
 (4)組織化されたコーパス。OED とか Webster 3 といった辞書は別として、大抵の一般辞書は(1)~(4)をデータとしてきたのであるが、比重はどちらかといえ(1)と(2)にあったといつてよかろう。しかし、1970年代に入ってこの比重が逆転する動きがみられるようになる。これを象徴するのが電算化コーパスから見出し語、語義、用例を本格的に帰納した辞書、*The American Heritage School Dictionary* (1972) の出現である。序文によると資料収集開始は1969年とあるから僅か三年で完成したことになる。まさに驚異的なスピードである。コーパスには二つあり、その構成は次の様である。

I 語数 テキスト	トークン 約500万 タイプ 約8万7千 米国の小学4年~9年の生徒対象の教科書、百科事典、アトラス、小説、雑誌、キット等約1000点
II 語数 テキスト	トークン 約10万 (頻度の高い機能語 (250語) のためのコーパス) I にほぼ同じ
引用ファイル	70万(I, IIのコーパスからセレクトしたもの)

AHSD の見出し語の選定(主見出し語約3万5千、派生語を含めると約5万)は、コーパス I のアルファベット・リスト(頻度順に配列したものに、分布数値をつけたもの)によってなされた。後にこれは、John B. Carroll, et al. eds. 1971. *The American Heritage Word Frequency Book* (Houghton Mifflin) として発売され、日本でも英和辞典の頻度表示に一役かってきたのは周知の事実である。語義と用例は70万の用例ファイルから帰納的に抽出された。もっとも全てがコーパスから帰納されたのではない。見出し語にアルファベット・リストに無いものも含まれていることからして、親版の AHD をある程度参考に行っているらしい。序文にもその旨うたっている。ついでながら、この辞書のもう一つの特徴は Ms を収録した最初の辞書、性差別の定義・用例を含まない Non-sexist 辞書として高く評

価されていることである (cf. Graham 1973; Schram 1979)。この事は序文で全く触れていないから、実例から帰納した結果このような好ましい形に落ち着いたのであろう。このように短期間にできたにもかかわらず、編集方法は時代を先取りしており、その結果として優れた定義・用例を備え、辞書史上特筆すべき辞書である。日本では「辞書学的に」海外の辞書を評価しない傾向があるため、この事実はほとんど無視されているのでなかろうか⁽¹⁾。

さて電算化コーパスを究極にまで辞書編集に生かしたのは、*Collins COBUILD English Dictionary* (COBUILD) である⁽²⁾。書き言葉(小説、新聞、雑誌等)及び話し言葉(会話、講演、台本無しの放送等)をカバーした約2千万語の電算化コーパスをフルに活用した成果はその語義と用例に顕著に表れている。alas の扱いを比較してみよう。

int cry of sorrow or regret [OALD (1980)]

interj lit (a cry of expressing sorrow or fear) [LDOCE (2nd ed.)]

(1) used to say that a particular situation seems sad, unfortunate or regrettable to you; a rather formal, or old-fashioned use. EG *There was, alas, no shortage of assassinations... Alas for good intents, no notice was taken of these things.* (2) an old-fashioned exclamation that expresses grief, regret, shame, or sympathy. EG *Alas, what ill luck has befallen us!* [COBUILD]

LDOCE の記述は OALD のそれより *lit* (文語)がある点で優れている。これもコーパス準拠の強みであろう⁽³⁾。そして COBUILD は英語の現在の語法を最も忠実に反映している点で LDOCE より一歩進んでいる。Fox & Hanks (1987)によると(1)の文副詞 (unfortunately に相当)としての例はコウビルドコーパスに約80例もあるという。(1)(2)(3)に依存度の高い辞書ではこのような語法事実を反映するのは困難であろう。

英和辞典の場合はどうであろうか。この場合、(2)母国語話者としての内省、直観は原則として除外されるので、(1)(3)(4)がその対象となる。(1)に対する依存度が極めて高かったことは否定できない事実であるが、(1)から少

しでも離脱しようという努力がここ数年顕著である。しかし、本格的なコーパスなしで英和辞典を作ってきた実績があるので、語義、用例を本格的なコーパスから帰納することの意義自体が実感されるのはまだ先のはなしであろう。それより(3)インフォーマントの効果的な利用が先決である。現在でも既にインフォーマント参加は普通になってきているが、まだ形式参加の域を出ていないように思われる。

現代英語の場合インプットすべきデータは無限なのでいかにコンピューターを駆使しても現代英語の全貌をくまなく把握することはできない。この点 OE, ME などのデータはある程度限られているので一度インプットしてしまえばそのデータの検索、統合、分類にコンピューターは威力を発揮するだろう。また、頻度辞典、シソーラス辞典などに威力を発揮することも最近の出版状況から見て明らかである。また、OALD と LDOCE の比較研究に見られる様に最近では辞書をそっくりコンピューターに入れて機械可読データとして活用することも盛んである(e. g. Akkerman et al. 1985; Hurk & Meijs 1986). なお New OED プロジェクトについては Weiner (1985) などに詳しい。

最近では computer lexicography (コンピューター辞書学) という用語もすっかり定着した感がある。既に1981年にはコンピューター辞書学の学会が二つ開かれている。「辞書生産と発行におけるコンピューターの可能性と限界」(cf. Zampolli & Cappelli (eds.) 1983) と「エレクトロニクス時代における辞書学」(cf. Goetschalckx & Rolling (eds.) 1982) である。その後コンピューター辞書学は後述の EFL 辞書学とならんで辞書学会の花形といってよいだろう。

(2) EFL 辞書

ENL 辞書は主に受信 (decoding) の為の情報を得るために用いられる。即ち ENL 話者は専ら未知の単語の意味を調べたり、自信の持てない語の綴り・発音を確認するために ENL 辞書を用いるのである (cf. Quirk 1974; Greenbaum 1984)。従って、ENL 辞書の場合、意味記述に工夫を凝らすとか新語を追加するといった余地は残されているが、新しいアイデアを

盛り込む余地はそれ程ない。

一方 EFL 辞書は受信の為の機能のみならず発信 (encoding) の為の機能を果たさねばならない (cf. Atkins 1985)。辞書の発信の為の機能というのはまだ未開拓の部分が多く残されている。発信の為の機能に関わる情報とは何か。それをどの様な形式で提供すべきか。新しいアイデアを生み出す余地は無限にある。また新しいアイデアを盛り込んだ辞書がさばける EFL/ESL マーケットは年々拡大している。ここに EFL 辞書産業の隆盛を見る。1970年後半が OALD と LDOCE 対決の時期とすると、1980年代前半はその簡約版——*Oxford Student's Dictionary of Current English* (1981), *Oxford Student's Dictionary of American English* (1983), *Longman Active Study Dictionary of English* (1983), *Longman Dictionary of American English* (1983) による代理戦争の年といえるだろう。これに *Chambers Universal Learners' Dictionary* (1980) が加わってますます混沌としてきたが、さらに LDOCE の改訂版(1987), COBUILD (1987) が出て、1980年代後半は、OALD, LDOCE, COBUILD の3強対立の時代をむかえた。これに呼応して EFL 辞書学も活況を呈した。*Applied Linguistics* 2(3) (1981) は「辞書学と教育への応用」特集を組み、Illson (ed.) *Dictionaries, Lexicography and Language Learning* (1985) が Pergamon 社の ELT Documents の一巻として出た。Niemeyer 社の Major Series の一巻として出た Lemmens & Wekker (1986) は OALD と LDOCE の文法記述の比較検討をおこなった。1983年英国のエクセター大学で開かれた辞書学国際会議のテーマの一つは「2言語使用辞典と学習辞典」(cf. Hartman (ed.) 1984) であり、1986年の EURALEX セミナーの主要テーマも「辞書と言語学習者」であった (cf. Cowie (ed.) 1987)。他のヨーロッパ各地で開かれるさまざまな辞書学会で EFL 関係のペーパーが読まれないということは無いと言ってよからう。

さて上で OALD, LDOCE, COBUILD を3強と述べたが、この3者をいくつかの面から比較してみよう。まず現実の語法に関する情報量の点では、alas の例で見たように COBUILD>LDOCE>OALD の順であろう。しかし、対照語用論 (contrastive pragmatics) の情報の量では、池上嘉

彦氏が日本人レキシコグラファーとして参加している LDOCE が群を抜いている。LDOCE>COBUILD>OALD の順であろう。検索の容易さという点でも、批判に答えて文法コードに代わる提示を工夫した LDOCE がトップで、LDOCE>OALD>COBUILD の順であろうか。COBUILD の文単位の定義、欄外表示は初めての試みであり、慣れるまでまだ時間がかかるだろう。Underhill (1985) は学習者が辞書から得る情報を「特定の情報」(specific information)と「付随的に気が付くこと」(incidental awareness) の2つに分けている。前者は学習者が辞書から得ようとして得る情報で後者は前者を得る過程で付随的に得る情報である。COBUILD は上で述べたように検索にやや手間がかかるが、型破りの辞書だけに何が盛られているか分からないという魅力がある。この点では、COBUILD>LDOCE>OALD の順であろうか。総合的に見て LDOCE と COBUILD は拮抗するが、OALD は編集の方法論自体に於ても、内容に於ても一歩後れを取るに至ったといわざるをえないようである。「語法 (usage) は意図的に作り出されるものでなく、非意図的に作り出されたもの」という見方が正しいとすれば、内省や直観に頼って用例を作るのはこれに本質的に合わないし、いかに優れた言語学者であっても内省や直観だけでは語法全般を把握できないというのは今や言語学の常識である。OALD は名詞の \square \square 、動詞型のコード表示という画期的な方法を採用して発信型辞書の基盤を築いたが、初版以来改訂と言っても動詞型の増減ぐらいで大幅な改訂はなく色あせた感は免れない。1989年には改訂版が出るという。これに期待したい。

(3) 2つの辞書学学会：DSNA と EURALEX

D. Crystal (1987): *The Cambridge Encyclopedia of Language* によれば辞書学は20世紀に入ってから言語学の影響下のもと、学問的課題として発展してきたが、これを促進したのは、学会活動の活性化であるという。その中心となるのが DSNA (Dictionary Society of North America) と EURALEX (European Association for Lexicography) である。

DSNA は1975年インディアナ州立大学で行われた辞書学学会で「辞書

に関する学問的・実用的活動を培う」ことを目的に設立された。学会は2年ごとに開かれ(1977, 1979, 1981, 1983, 1985, 1987), 1981年までの議事録は *Papers of the Dictionary Society of North America* としてすでに発行済みである。1975年以前の学会で読まれた論文(1971, 1975年)は *Papers on Lexicography in Honor of Warren N. Cordell* (1975) に収録されている。1983年にデラウェアで開かれた学会の論文は *Papers in Linguistics* Vol. 18, No. 1 (1985)/Vol. 19, No. 1 (1986) の特集記事「辞書学の進歩」に収められている (Vol. 18 では理論・コンピュータ中心, Vol. 19 では英語・2言語使用辞書中心の編集になっている) 1985年の学会論文については現在のところ未詳である。

定例会学のほか臨時学会も開かれる。1978年にイリノイ大学で開かれた学会の論文は Zgusta (ed.) (1979). *The Theory and Method in Lexicography* に収められている。

年2回ニューズレターが発行されるほか年1回機関誌 *Dictionaries* (創刊1979年)が発行される。現在まで8号が出ている。辞書に関するあらゆる情報—辞書編集, 批評, 用途, 歴史, 収集, 辞書及び辞書学関係文献の書評, ビブリオグラフィ—等をカバーしている。2言語使用辞書, EFL/ESL 辞書関係のものはそう多く無いが英和辞典の編集に参考になりそうな論文をいくつか拾い上げてみる。(下記の論文はIII章「英語辞書学の文献と解題」のリストから省いた)。

Stein, G. The best British and American lexicography (No. 1)

Arnold, D. I. Synonyms and the college-level dictionary (No. 1)

Nguyen, D-H. Teaching culture through bilingual dictionaries
(No. 2)

Steiner, R. J. Guidelines for reviewers of bilingual dictionaries
(No. 6)

Iannucci, J. E. Sense discriminations and translation complements
in bilingual dictionaries (No. 7)

Steele, J. A lexical entry for an explanatory-combinatorial dictionary of English (*hope* II. 1) (No. 8)

さて1983年、英国のエクセター大学で開かれた LEXeter' 83 において、ヨーロッパ辞書学協会 (EURALEX) の設立が可決された。その目的は DSNA のそれとほぼ同じであるが「レクシコグラファーの訓練を含めて、学問的・実用活動を促進する」のように「レクシコグラファーの訓練を含めて」という点がやや異なる。これまでのレクシコグラファーは徒弟見習的な性格が強かったが、大学の専門機関を通して専門職業人としてのレクシコグラファーを養成、あるいは、すでにレクシコグラファーの職に就いている人を再教育しようとするもので、これに呼応して既にいくつかの大学の MA コースに辞書学の講座が設置され、集中講座も実施されるに到っている。(cf. Sinclair 1984; Hartmann 1986; Gates 1986; Rey 1986)。

EURALEX は年に2回 *EURALEX Bulletin* を発行している。内容は辞書学に関するエッセイ、新刊書の紹介・批評・予告、諸学会の活動報告・開催予告など小冊子ながら最新のニュースを収録している。また、DSNA との提携でドイツの Niemeyer 社より辞書学年報 *Lexicographica* を出している。第1巻は(1984)「ドイツ語の1言語および2言語使用辞書」特集で、第2巻 Kučera (ed.) (1986) は「2言語使用辞書の問題点」である。これの補遺として Series Major がある。現在までに10数巻発行されているが、英語関係は、Hartmann (ed.) (1984), Dolezal (1985), Hyldgaard-Jensen & Zettersten (eds.) (1985), Lemmers & Wekker (1986), Cowie (ed.) (1987) の5冊である。

以上に加えて二つの辞書調査研究所の活動を追加しておきたい。まず、ECDR (Erlangen Centre for Dictionary Research) はドイツの Erlangen-Nurnberg 大学の F. J. Hausmann 教授を長とする団体でいくつかのプロジェクトを抱えているが我々に関係の深いものを取り上げてみると、*International Encyclopedia of Lexicography* と *An English Dictionary of Valencies* の編さんである。前者は既に一部は校正段階に入っており出版されるのも間もないであろう。

エクセター大学の言語センター (Language Center) 10周年記念に当たる1984年に辞書調査研究センター (DRC) が設立された。その目的とする処は、

1. エクセター大学における辞書学の組織的調査研究の促進
2. 辞書編集者の招聘と講演
3. 辞書学に関する情報交換の為の資料の蓄積
4. 学会の開催と出版の補助
5. ヨーロッパ及び全世界の辞書学団体の活動の支持

である。もっともセンターといってもこれ専用の建物がある訳でなく言語センター所長の Hartmann 博士の研究室がこれを兼ねているにすぎない。DRC 設立以前にもすでにいくつかの辞書学会がエクセター大学で開かれていた。主なものをいくつか挙げると英国応用言語学会辞書学セミナー(1978)、応用言語学辞書編集サマースクール(1980)、Lexeter '84(1983)などがある。DRC 設立後の主な活動は辞書学歴史セミナー(1986)と辞書学コース(1987年創設)の二つである。前者で発表された論文は *The History of Lexicography* (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, Vol. III. 40) に収められている。後者は内外のレクシコグラファーおよび辞書学専攻の大学院生を集めて行われる約1週間の集中セミナーで、午前が講義、午後がディスカッションである。1987年に試験的に始められたが好評だったので1988年以降も実施される予定である。

DRC 出版物の第1号は Learmouth and Macwilliam (eds.) (1986) *Historic English Dictionaries 1595-1899* である。これはエクセター大学図書館及びその近郊の図書館が所有する英語の一般辞書・特殊辞典の内1900年以前に発行されたものを162点リストアップして書誌学的解説をつけたもので、チェックリストとして利用できる。例えばジョンソンの辞書にはファクシミリのレプリント版を含めて様々の異本が出回っているがこの書には10数点の異本が網羅されているので便利である。

DRC では Hartmann を中心として辞書学文献リストをコンピュータにインプットする作業が進行中である。その数約数千点ということなのでもっとも包括的なデータベースといってよいだろう。次の様な形式でインプットされている。

- 54 Al-Kasimi, Ali, *Linguistics and Bilingual Dictionaries*. 1977, BILIM. Leiden: Brill TYPO

LING
SEMA
TRAN
USER
VARI

各項目には複数の分類記号が付いてあって多方面からの検索が可能である。例えば上記図書だと **Bilingual** の他 **Typology, Linguistics, Grammar, Semantics, Translation, User, Variation** の面からもこの本を抽出できる仕組みになっている。最近では辞書学関係の文献は結構多いのでプリントアウトしてもすぐ時代遅れになる。このように新しい情報が入り次第インプット出来るコンピューター管理の文献目録が最も能率的であろう。

II. 言語理論と英和辞典の語義記述

辞書の語義・文法記述に関わる理論のいくつかを見てみよう。まずバレンシー理論 (valency theory) についてであるが⁽⁴⁾ 最近のもので辞書への応用を提案したものに、Herbst (1987) がある。そこではバレンシー記述に選択制限を加味したフォーマットの効用が説かれている。

APPLY V

1 to request something, to ask for

N/Pron + (to N/Pron) + for N/Pron

PERSON/ PERSON/ e. g. scholarship, job, help

INSTITUTION INSTITUTION

確かにこれは下記の LDOCE の記述に優っている。

APPLY... [I (to, for)] to request something, esp. officially and
in writing...

なぜなら、Herbst の主張するように、この記述だと次の非文をブロックできないからである。

(1) *She applied to a scholarship to study in Ireland.

(2) *She applied for the German Academic Exchange Service.

しかし、我々日本人の目からみれば *Herbst* の提案にさほどの新鮮味はない。英和学習辞典では選択制限付きの文型表示はもはや常識化しているからである。『ジーニアス英和辞典』から該当箇所を引用しておこう。

2D [SV (to O_1) for O_2] <人が> (O_1 <人>に) O_2 <仕事・許可・援助など>を求める....

もっとも選択制限に対する英和辞典編集者の理解は充分とはいえない。例えば、大抵の英和辞典は *wide* に次のような記述を与えて、*wide* に選択制限を課したつもりになっている(?) ようである。

wide... (幅が) 広い

しかし、例えば、「幅の広い道路」「その道路は幅が広い」は、

(1) ? a road whose width is wide / ? a road of wide width

(2) ? The width of the road is wide.

ではなく、(3), (4) が普通である。即ち、(幅が) は *wide* と共起する名詞を特定化しているのでなく、

(3) a wide road

(4) The road is wide.

面積でなく幅の点で「広い」といっているわけでいわば「広い」の補足的説明である。従って上の記述は、

wide... (道路などが) 幅の広い...

のようになるべきで、これで始めて選択制限を示したことになるのである。従来の補足的説明に「が」とか「を」つければ自動的に選択制限になるわけでないことをもっと充分認識する必要があるだろう。

さて英国の代表的 EFL 辞典 OALD, LDOCE, COBUILD が選択制限を採用しない理由はスペースの問題がまず第一であろう。第二に記述の複雑化であろう。すでに述べたように、最近の辞書は、一般辞書も含めて情報の圧縮化よりも引き易さ、見易さを重視するにいたっている。しかし、英和辞典の場合、日本語で表示されるので引き易さの点で特に支障をきたさないという利点がある。なお、特殊辞典であるが下記の辞典では選択制限が採用されていることを付言しておきたい。

A. P. Cowie & R. Mackin. *Oxford Dictionary of Current Idio-*

matic English. Vol. 1: Verbs with Prepositions and Particles. OUP, 1975.

選択制限はコロケーション記述とも密接に関係する。この点で注目されたのが

M. Benson, et al. *The BBI Combinatory Dictionary of English.* John Benjamins, 1986.

である。しかし期待外れの内容であったといってよからう⁽⁵⁾。まず、文法連語(いわゆる文型)は EFL 辞典, 学習英和辞典以上の情報を与えてくれるとは言いがたいし、肝腎の語彙連語(いわゆるコロケーション)は、EFL 辞典, 学習英和辞典よりやや詳しいという程度で、勝俣『新英語活用辞典』とは比較にならない。この辞典を巡って *EURALEX Bulletin* (1987. 4(1) & 4(2)) 誌上で Hartmann と著者の M. Benson の間でちょっとした論争があった。その主旨は Hartmann 「EFL 辞典を凌ぐだけの情報量を持たない」、Benson 「そんなことはない、文法コードも複雑でなく、語彙連語の情報量も EFL 辞典よりも多い」というのであった。この場合、注意すべきは両者とも勝俣辞典の存在を知らないということである。もし知っていたら論争はもっと違った形を取っていたであろう。

さて、本題に戻ってバレンシー理論で注目すべきは目的語の扱いである⁽⁶⁾。

- (1) Oliver was reading/painting/hoeing/cleaning.
- (2) Oliver was watching/choosing/pushing/following.

(1)の目的語は動詞自体の意味からそれとなく分かるもので、省略されているのは非限定の (indefinite) 何かである。一方(2)の目的語は文脈から還元できる (contextually recoverable) 限定された (definite) 物ないしは人で、補うとすれば *it, him, us, them* 等である。換言すれば(1)では文脈から還元できる限定された物あるいは人に言及する場合は、*Oliver was reading it. / Oliver was painting her.* のように目的語を明示する必要があるが、(2)では目的語の表示は選択的ということになる。筆者の知るかぎりではこのような差異を念頭に置いて自動詞・他動詞の区別を設けている英和辞典はないようである。次例はある学会の論文概要送付規定の一節で

ある。

Abstracts should be 200-300 words, double-spaced, submitted in duplicate, and show name, institutional affiliation and current mailing address at the top. Early submission is encouraged. *Send* by December 1....

この *send* は明らかに(2)のタイプの自動詞用法で、ごくありふれた用法のようにおもわれる。英和辞典に記載するとすれば、

自 (文脈からそれと分かる目的語を省略して)送る, 送付する...
のようになろう。しかし、上で触れたように、この種の用法は見落とされているようである。ちなみに『ジーニアス』の扱いは次のようである (用例は略)。

自 1 [...に] 伝令を出す, 使者を派遣する [to]; [... するために]
人を派遣する [to do]. 2 信号(など)を送る。

異なる視野に立てば、いままで見えていなかったものが見えてくる訳で、レクシコグラファーは固定観念に縛られてはいけない事を示す好例であろう。

語義記述で今後注目すべき理論は Carter (1983) (1987) の核語彙 (core vocabulary) 理論である。細かい議論はさておいて結論だけを述べれば、次の各グループのイタリックも語が核語 (core word) である。

guffaw, chuckle, giggle, laugh, jeer, snigger
weedy, emaciated, skinny, lean, thin, slim, slender

非核語は核語+修飾語によって示されるのでシノニム間の差異が明確に提示される。核語はフォーマリティ (formality), プラス・マイナスの評価 (evaluation), 意味の強弱 (potency) のスケールの中に位置し、コロケーション領域は非核語より広い。次の *bright* (核語) と *radiant* (非核語) の対比参照。

bright sun (light, sky, idea, colours, green, future, prospects, child)
radiant light (smile, sun, ?flame, *green, *idea, *prospects, ?future)

Pin の発音と綴りはこれだけ取り出して練習するよりも pen と比較して練習したほうがより正確に習得出来るとされる。これと同じで語の意味も

対比によってより正確に把握されよう。但しこの場合、対比は厳密な基準に則ってなされねばならない。従来の「slim (しなやかで) すらりとした, slender (魅力的で) ほっそりした」式の対比は無益である。核語彙の概念自体はそう新しいものではない。しかしこれをきちんと理論化したところに核語彙理論の意義があり応用価値があるといえよう。

この核語彙理論と並行する形で出されたのが Stubbs (1986) の中核語彙 (nuclear vocabulary) 理論である。語義記述よりもむしろ見出し語の重要語段階表示に関わる面が大きいが参考になる点が多いので簡単に紹介したい。中核語彙とは文字通り英語語彙の中核を成す語彙で、幼児の言語習得、ENL 及び EFL 教育、読解の難易度、辞書研究の分野で重要な役割を果たすものである。中核語彙の基準として次の12のテストが上げられている。

1. 純粋に概念的、知的、論理的、命題の意味のみを持ち感情的、評価的コンテクションを持たない。
2. 文化自由 (culture free) である (e.g. give; award. donate)。
3. 特定の談話の場 (field of discourse) に限定されないという点で語用論的に中立的である (e.g. stomach; abdomen)
4. 談話のスタイル (tenor of discourse) ・ 談話の媒体 (mode of discourse) に関しても中立的である。
5. 文学作品などのテキストを要約する際に好んで用いられる。
6. 下位語 (hyponym) でなくむしろ上位語 (superordinate) である。
7. 総称的であるので非中核語の代用が可能である。この逆は成立しない。
8. 非中核語の定義に用いることができる。この逆は成立しない。
9. 連語領域が広い。
10. 総称的であるので意味の拡大が生じ易い(多義語的性格)。
11. 複合語を多数持つ。
12. 明確な反義語 (antonym) を持つ。

学習英和辞典のほとんどが重要語段階表示を採用している。しかし、その表示にはかなりのばらつきがある。どのような頻度調査を行ったのか、あるいはどのような頻度調査・頻度辞典を利用したのかそのプロセスは公

表しないで結果のみ示すのが普通なので、推測するより方法がないが、既成の頻度調査・頻度辞典の数は限られているので（例えば、Thorndike (1921) *Teachers' Wordbook* / Thorndike and Lorge (1933) *Teachers' Wordbook of 30000 words* / West (1953) *General Service List* / Kučera & Francis (1967) *Computational Analysis of Present-day American English* / Carroll et al. (1971) *American Heritage Word Frequency Book* / Hindmarsh (1980) *Cambridge English Lexicon* / Engels et al. (1981) *L. E. T. Vocabulary-List* / Hofland & Johansson (1982) *Word Frequencies in British and American English* など）ばらつきが出るのは組合わせの相違であろう。しかし、いずれにしても、「重要度と頻度は比例する」という発想が共通してあるようである。この発想は辞書が受信型辞書を目指している場合には問題はないが、発信型辞書を目指している場合には問題がある。例えば、*chair* と *seat* で *chair* のほうが頻度が高かったとしても発信型辞書では *seat* が上位にランクされよう。なぜなら 6, 7 の基準により *seat* の方が応用範囲が広いからである。このように本当に受信型から発信型に転換するためには単に語用論的情報を付け加えるだけでは不十分で、重要度の基準を見直す必要がある。それにはこの中核語彙理論が一つの手がかりを与えてくれるだろう。

最後に英和辞典に直接関係しないが、英語辞典の語義記述の比較に役立つようなのは Dik (1978) の段階的語彙分解理論である⁴⁷⁾。既にこれに基づいて、OALD の語義記述と LDOCE の制限語彙による語義記述の比較検討も行われている (cf. Hurk & Meijs (1986))。我々は現在三つの優れた EFL 辞典を持つ。従来定義形式を踏襲する OALD, 2000 語制限語彙定義の LDOCE, 文形式の定義を採用した COBUILD である。我々英語の非母国語話者にとって最も適した EFL 辞典とは何かを比較検討する上で Dik の理論は有用な基準を提供してくれるかもしれない。

III. 英語辞書学の文献と解題

既に述べたように日本では英米で発行される辞書に対する関心は深いが、

辞書に関する研究、学会の動向などに対する関心は比較的薄く、この方面の文献の整備は英語学の他の分野に比べて遅れているように思われる。例えば、Webster 3 を巡る論争について知りたい場合、この方面に少しでも詳しい人は Gray (eds.) (1963), Sledd & Ebbitt (eds.) (1962) を思いつくだろうが、この辞書に対抗して出された AHD あるいはその流れを汲む *Harper Dictionary of Contemporary Usage* に対する論議となると上記のような便利な書が無いだけに情報の検索に苦勞するのではないだろうか。同様のことは、辞書を巡る様々のトピック——EFL 辞典の最近の傾向と問題点 (情報の圧縮化と検索の容易さ、受信型辞書から発信型辞書への転換など)、電算化コーパスと英語辞書の将来、英語辞書の語義記述の比較論、辞書指導と言語教育、辞書利用者の実態・意識調査、1 言語使用辞典と 2 言語使用辞典の比較、語彙の理論研究と辞書記述、辞書の分類 (dictionary typology)、対照言語学と 2 言語使用用辞典、英米における辞書の発達と系譜、記述主義と規範主義、辞書の社会的役割など、にあてはまる。ただし、本稿ではトピック別にしないで、著者のアルファベット順に文献を配列した。大抵の文献は 2 つ以上のトピックにまたがっており、重複して挙げる手間を避けるためである。

原則として 1960 年以降に英語で書かれた文献で英語の辞書を対象にしたものに限定した。未入手・未見の文献は省いたが基礎文献と思われるものは未入手・未見でも * 印をつけて載せた。辞書学は、分割語法 (divided usage) に関わる諸問題 (実態、評価等)、言語の変異 (方言、レジスター、New Englishes 等) にも密接に関わってくるがこれらの文献も省いた。また、語彙論の領域一般に属する文献、例えば、J. Aitchison (1987): *Words in the Mind* なども原則として省いた。

[A]

Aitken, A. J. et al. (eds.) 1973. *The Computer and Literary Studies*.
Edinburgh UP.

_____. 1978. Historical dictionaries, word frequency distributions and the computer. *Cahiers de Lexicologie* XXXII-1.

_____. 1987. The period dictionaries. In Burchfield (ed.)

- Akkerman, E. et al. 1985. *Designing a Computerized Lexicon for Linguistic Purposes*. University of Amsterdam.
- Algeo, J. 1986. Review of Illson (ed.) *Lexicography : An Emerging International Profession*. *Dictionaries* 8.
- Al-Kasimi, A. M. 1977. *Linguistics and Bilingual Dictionaries*. Brill.
2 言語使用辞書の在り方を発音, 意味, 文法等の面から検討。現在の英和辞典の内容から見て時代遅れの指摘もあるが, 今なお, 参考になる。
- Allen, R. E. 1986. A Concise history of the *Concise Oxford Dictionary*. In Hartmann (ed.) 1986.
- Anderson, Y. 1983. *Papers of the Dictionary Society of North America* 1981, DSNA.
- Anthony, E. M. 1975. Lexicon and vocabulary. *RELC Journal* 6 (1).
- Apresyan, Y. D. et al. 1969. Semantics and lexicography; towards a new type of unilingual dictionary. Kiefer, D. (ed.) *Studies in Syntax and Semantics*, Reidel.
- Atkins, B. T. 1985. Monolingual and bilingual learners' dictionaries: a comparison, Illson (ed.) 1985.
- Ayto, J. 1981, Report on Exeter summer school in lexicography. *BALL Newsletter*, No. 11.

[B]

- Bahr, J. 1978. Reflections on the project of a lexical data bank. *Cahiers de Lexicologie* XXXII-1.
- Bailey, R. W. 1986. Dictionaries of the next century. In Illson (ed.) 1986.
_____. (ed.) 1986, *Dictionaries of English*. The University of Michigan Press. Bailey, Burchfield, Cassidy, Aitken, Hartmann などこの分野を代表する学者の論文9編を収録。
- Baker, S. 1972. The sociology of dictionaries and the sociology of words. In Weinbrot (ed.)
- Barnhart, C. L. 1962. Problems in editing commercial monolingual

- dictionaries. In Householder and Saporta (eds.)
- _____. 1976. Methods and standards for collecting citations for English Dictionaries, G. Nickel (ed.) (1976). *Proceedings of the Fourth International Congress of Applied Linguistics*, Vol. 3. Hochschl Verlag Stuttgart.
- _____. 1978. American lexicography, 1945-1973. *American Speech* 53.
- _____. 1980. What makes a dictionary authoritative. In Zgusta (ed.) 1980.
- Bartholomew, D. A. & L. C. Schoenhals. 1983. *Bilingual Dictionaries for Indigenous Languages*. Summer Institute of Linguistics.
- Bauer, L. 1980. Review of *Longman Dictionary of Contemporary English*. *RECL Journal* 11 (1).
- Baxter, J. 1980, The dictionary and vocabulary behavior: a single word or a handful? *TRISOL Quarterly* 14 (3).
- Beattie, N. 1973. Teaching dictionary use. *Modern Languages*, LIV (4)
- Bejoint, M. 1981, The foreign student's use of monolingual English dictionaries: a study of language needs and reference skills. *Applied Linguistics* 2(3).
- _____. 1979, The use of informants in dictionary making. In Hartmann (ed.) 1979.
- Benson, M. 1985, Lexical combinability. *Papeers in linguistics* 18 (1).
- _____. 1985. Collocation and idioms. Illson (ed.) 1985.
- _____. Benson, E. & Illson, R. 1986. *Lexicographic Description of English*. John Benjamins. 英米の語彙比較の一覧表が最も参考になる。
- Bensoussan, M., D. Sim & R. Weiss. 1984. The effect of dictionary usage on EFL test performance compared with student and teacher attitudes and expectations. *Reading in a Foreign Language*, Vol. 2, No. 2.

- Berry-Rogge, G. 1973. The computation of collocations and their relevance in lexical studies. In Aitken *et al.* (eds.) 1973.
- Bronstein, A. 1984. Updating a dictionary of American pronunciation. In Hartmann (ed.) 1984.
- _____. 1986. The history of pronunciation in English-language dictionaries. In Hartmann (ed.) 1986.
- Brown, D.F. 1974. Advanced vocabulary teaching: the problem of collocation. *RELC Journal* 5 (2).
- Brown, L.A. and R.W. Lynn. 1976. Review of *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. *RELC Journal* 7 (1).
- Burchfield, R.W. 1984. Dictionaries, new and old. *Encounter* 63 (3).
- _____. 1986. The Oxford English Dictionary. In Illson (ed.) 1986.
- _____. 1987. (ed.) *Studies in Lexicography*. OUP. 歴史的配列の辞書, 時代別辞書, 方言辞書, 学習辞書などに関する論文10編を収録。
- Butler, M. 1987. Lexicography since Dr. Johnson. *EFL Gazette*. No. 95.

[C]

- Calzolari, N. et al. 1984. Computational tools for an analysis of terminological data in a dictionary. In Hartmann (ed.) 1984.
- Carter, R. 1982. A note on core vocabulary. *NLC*, Vol. 11, No. 2.
- _____. 1986. Core vocabulary and discourse in the curriculum: a question of the subject. *RELC Journal* 17 (1).
- _____. 1987. *Vocabulary*. *Applied Linguistic Perspectives*. Allen & Unwin. 核語彙理論を含めて, 英国における最近の語彙研究の成果と動向を知ることができる。
- Cassidy, F.G. 1980. Computer mapping of a lexical variants for *DARE*. In Zgusta (ed.) 1980.
- _____. 1987. *The Dictionary of American Regional English* as a resource for language study. In Burchfield. (ed.) 1987.
- *Congleton, J.E. et al. (eds.) 1979. *Papers in Lexicography in Honor*

- of Warren N. Cordell. DSNA and Indiana State University.
- Cook, D. 1959. A point of lexicographical method. *American Speech* 34.
- Cowie, A. P. 1978. The place of illustrative material and collocations in the design of learner's dictionary. In Strevens (ed.) 1978.
- _____. 1979. The treatment of polysemy in the design of a learner's dictionary. In Hartmann (ed.) 1979.
- _____. 1981. Lexicography and its pedagogic applications: an introduction. *Applied Linguistics* 2(3).
- _____. 1981. The treatment of collocations and idioms in learners' dictionaries. *Applied Linguistics* 2(3).
- _____. 1982. Polysmy and the structure of lexical fields. *NLC*, Vol. 11,, No. 2
- _____. 1984. EFL dictionaries: past achievements and present needs. In Hartmann (ed.) 1984.
- _____. (ed.) 1987. *The Dictionary and the Language Learner*.
- Niemeyer. 1985年. リーズで開かれた EURALEX セミナーの議事録。
- Creswell, T. 1975. *Usage in Dictionaries and Dictionaries of Usage*.
- ADS. AHD の語法の取り扱いを記述主義的な立場から厳しく批判。
- Cruse, D. A. 1982. On lexical ambiguity. *NLC*, Vol. 11, No. 2.
- Crystal, D. 1986. The ideal dictionary, lexicographer and user. In Illson (ed.) 1986c.
- Cunningham, S. 1987. Using dictionaries in the classroom. *EFL Gazette*, No. 95.

[D]

- Dagenais, L. 1984. Two principles in definitions of an explanatory-combinatorial dictionary. In Hartmann (ed.) 1984.
- Dalgish, G. M. 1984. Review of *Longman Dictionary of American English: a dictionary for learners of English*. *TRISOL Quarterly* 18(1).

- Derolel, R. 1972. Two new dictionaries. *English Studies* 53.
- Dolezal, F. 1985. *Forgotten but Important Lexicographers: John Wilkins and William Lloyd*. Niemeyer.
- _____. 1986. How abstract is the English dictionary? In Hartmann (ed.) 1986.
- Drysdale, P. 1981. The idiocy of idioms: a problem in lexicography. *CJL/RCL* 26 (1).
- _____. 1969. Lexicography: statics and dynamics. *CJL/RCL* 14 (2).
- Dubois, J. 1981. Models of the dictionary; evolution in dictionary design. *Applied Linguistics* 2 (3).
- [E]
- Eagleson, R. D. 1974. Review of *Lexicography in English*. *Journal of English Linguistics* 8.
- [F]
- Fox, G. & P. Hanks. 1987. A new look at English. MS.
- *Friends, J. H. 1967. *The Development of American Lexicography. 1798-1864*. Mouton.
- [G]
- Gallardo, A. 1980. Dictionaries and the standardization process. In Zgusta (ed.) 1980.
- Gates, J. E. 1972. A survey of the teaching of lexicography. *Dictionaries* 1.
- _____. 1986. Preparation for lexicography as a career in the United States. In Illson (ed.) 1986.
- Georgacas, D. J. 1976. The present state of lexicography and Zgusta's *Manual of Lexicography*. *Orbis* XXV (2).
- Gimson, A. C. 1981. Pronunciation in EFL dictionaries. *Applied Linguistics* 2 (3)
- Gleason, H. A. 1967. The relation of lexicon and grammar. In Householder and Saporta (eds.) 1962.

- Goetschalckx, J. & L. Rolling. (eds.) 1982. *Lexicography in the Electronic Age*. North-Holland. 1981年ルクセンブルグで開かれたシンポジウムの議事録。
- Gold, D.L. 1975. New perspective in North American lexicography (I) (II). *babel* XXI (1), XXII (4).
- _____, 1980. The dictionary and lexical structure. *babel* XXVI (3).
- Gorlach, M. 1985. Lexicographical problems of new Englishes and English-related Pidgin and Creole languages. In Hyldgaard & Zettersten (eds.).
- Gove, P.B. 1964. Reading from the lexicographer's viewpoint. *The Reading Teacher* 18.
- *_____. 1967. *The Role of the Dictionary*. Bobbs-Merrill.
- _____. 1968. Subject orientation within the definition. *George-Town University Monograph Series* 14.
- Graham, A. 1973. Making a non-sexist dictionary. Ms. December 1973.
- Gray, J. (ed.) 1963. *Words, Words, and Words about Dictionaries*. Chandler. Webster 3 を巡る論文(6編)を含めて約20編収録。辞書の序文論文が多い。
- Greenbaum, S. 1984. The image of the dictionary for American college students. *Dictionaries* 6.
- [H]
- Hanks, P. 1979. To what extent does a dictionary definition define? In Hartmann (ed.) 1979.
- Hartmann, R. R. K. (ed.) 1979. *Dictionaries and Their Users*, University of Exeter. 1978年にエクセター大学で開かれた英国応用言語学会(BALL)辞書学セミナーで発表された論文を集めたもの。
- _____. 1979. Who needs dictionaries? In Hartmann (ed.) 1979.
- _____. 1981. Style values; linguistic approaches and lexicogra-

- phical practice. *Applied Linguistics* 2(3).
- _____. 1982. *Lexicography: an annotated minimum bibliography*. *NLC*, Vol. 11, No. 2.
- _____. (ed.) 1983. *Lexicography: Principles and Practice*. Academic Press. (木原研三 & 加藤知己(監訳)『辞書学：その原理と応用』三省堂。1984).
- _____. 1984. *Lexicography: a contrastive survey*. *Annual Review of Applied Linguistics* V.
- _____. (ed.) 1984. *LEXeter '83: Proceedings*. Niemeyer. 1983年に開かれた辞書学国際会議の議事録。論文約50編収録。
- _____. 1985. *Contrastive text analysis and the search for equivalence in the bilingual dictionary*. In K. Hyldgaard-Jensen and A. Zettersten (eds.) 1985.
- _____. 1986. The training and professional development of lexicographers in the UK. In Illson (ed.) 1986c.
- _____. 1986. (ed.) *The History of Lexicography*. John Benjamins. エクセター大学辞書調査研究センター主催の歴史辞書学セミナーで読まれた論文24編を収録。
- _____. 1988. *Sociology of the dictionary user*. *International Encyclopedia of Lexicography*. ECDR.
- _____. 1988. The dictionary as an aid to foreign-language teaching. *International Encyclopedia of Lexicography*. ECDR.
- Hayashi, T. 1978. *The Theory of English Lexicography 1530-1791*. John Benjamins.
- Herbst, T. 1986. Defining with a controlled defining vocabulary in foreign learners' dictionaries. In Kučera et al. (eds.) 1986.
- _____. 1987. A proposal for a valency dictionary of English. In Illson (ed.) 1987.
- Hietsch, O. 1958. Meaning discriminations in modern lexicography. *Modern Language Journal* XLII.

- Hill, A. A. 1948, The use of dictionaries in language teaching. *Language Learning* 1
- _____. 1970. Laymen, lexicographers, and linguists. *Language* 46 (2).
- Hill, C P. 1985, Alternatives to dictionaries. Illson (ed.) 1985.
- Hohulin, E.L. 1986. The absence of lexical equivalence and cases of its asymmetry. In Kučera et al. (eds.) 1986.
- Householder, F. & S. Saporta. (eds.) 1967. *Problems in Lexicography*. Mouton, 1960年インディアナ大学で開かれた辞書学会の議事録。約20編収録。この学会で、言語学の一分野としての lexicography が確立した。
- Hulbert, J.R. 1955, *Dictionaries: British and American*. Andre Deutsch. 1968 (Revised) (中西秀男訳『英米の辞書』北星堂書店。1957)。
- Hurk, I van den & W. Meijs. 1986. The dictionary as corpus: analyzing LDOCE's definition-language. In J. Aarts & W. Meijs (eds.) (1986) : *Corpus Linguistics II*. Rodoploji.
- Hyldgaard-Jensen, K. & A. Zettersten, (eds.) 1985. *Symposium on Lexicography II*. Niemeyer. (Lexicographica Series Major, 5). 1984年コペンハーゲンで開かれた第2回辞書学国際シンポジウムの議事録。

[I]

- Iannucci, J.E. 1957. Meaning discrimination in bilingual dictionaries: a new lexicographical technique. *Modern Language Journal* XLI.
- Illson, R. 1976. Reciprocal items in dictionaries. G. Nickel (ed.). *Proceedings of the Fourth International Congress of Applied Linguistics*. _____: 1985. (ed.). *Dictionaries, Lexicography and Language Learning*. Pergamon. 辞書学の論文集が ELT Documents の一巻に加わったことに意義がある。
- _____ 1986a. General English dictionaries for foreign learners. In Kučera et al. (eds.) 1986.
- _____ 1986b. Lexicographic archaeology: comparing dictionaries

of the same family. In Hartmann (ed.) 1986.

_____. 1986c. (ed.) *Lexicography: An Emerging International Profession*. Manchester University Press. 1984年ロンドンで開かれた第一回フルブライト辞書学専門家会議の議事録。論文13編収録。

_____. 1986d. *British and American Dictionaries*. In Illson (ed.) 1986.

_____. 1986e. (ed.) *A Spectrum of Lexicography*. John Benjamins. 1984年ブラッセルで開催された第7回 AILA 世界会議で読まれた論文10編を収録。

[J]

Jackson, H. 1975. What's in a bilingual dictionary? *Modern Languages LVI* (2).

_____. 1979. Review of *Longman Dictionary of Contemporary English*. *MALS Journal* 4.

_____. 1985. Grammar in the dictionary. Illson (ed.) 1985.

Jain, M. P. On meaning in the foreign learner's dictionary. *Applied Linguistics* 2 (3).

Jenkinson, E. B. 1979, How to keep dictionaries out of the public schools. *Verbatim*, Vol. V (4).

Jones, S. & J. McH Sinclair. 1974. English lexical collocations. *Cahiers de Lexicologie* XXIII-II.

Josselson, H. 1966. Automatization of lexicography. *Cahiers de Lexicologie* IX-II.

[K]

Kachru, B. 1980. The new Englishes and old dictionaries: directions in lexicographical research on non-native varieties of English. In Zgusta (ed.) 1980.

Kelly, P G. 1979, Get the dictionary habit –a review article of *The Longman Dictionary of Contemporary English*. *babel* 15 (1).

Kipfer, B. A. 1984. *Workbook on Lexicography*. University of Exeter.

Hartmann (ed.) (1979) と姉妹編のワークブック。

- Kirkpatrick, B. 1985. A lexicographic dilemma: monolingual dictionaries for the native speaker and for the learner. Illson (ed.) 1985.
- *Kister, K. F. 1977. *Dictionary Buying Guide. A Consumer Guide to General English-Language Wordbooks in Print*. Bowker.
- Kučera, A. et al. (eds.) 1986. *Lexicographica* 2. Niemeyer. 2 言語使用辞典の問題点を特集。
- Kuhn, S. 1980. The art of writing a definition that does not define. In Zgusta (ed.) 1980.

[L]

- Lamy, M-N. 1985. Innovative practices in French monolingual learners' dictionaries as compared with their English counterparts. In Illson (ed.) 1985.
- Landau, S. I. 1984, *Dictionaries: the Art and Craft of Lexicography*. Charles Scribner's Sons.
- Lemmens, M. and H. Wekker. 1986. *Grammar in English Learners' Dictionaries*. Niemeyer.
- Lodwig, R. R. and E. F. Barrett. 1967. *Words Words Words: Vocabularies and Dictionaries*. Hayden.

[M]

- Makkai, A. 1980. Theoretical and practical aspects of an associative lexicon for 20th century English. In Zgusta (ed.) 1980.
- Malkiel, Y. 1971. Lexicography. In C. F. Reed (ed.) *The Learning of Language*. Appleton-Century-Crofts. 1971.
- _____. 1980. The lexicographer as a mediator between linguistics and society. In Zgusta (ed.) 1980.
- Mallinson, G. 1979, The dictionary and the lexicon: a happy medium? In Hartmann (ed.) 1979.
- Manley, J. 1985. Processing of excerpts for the bilingual dictionaries. In Hyldgaard & Zettersten (eds.) 1985.

- Marckwardt, A. H. 1949, Whither the desk dictionary. *Language Learning* 2 (1)
- _____. 1963. Dictionaries and the English language. *The English Journal*. LII (5).
- _____, 1974, Review of *A Dictionary of Modern American and British English on a Contrastive Basis*. *Journal of English Linguistics* 10.
- Martin, W. 1985, Reflections on learners' dictionaries. In Hyldgaard & Zettersten (eds.) 1985.
- *Mathews, M. M. 1933, 1966, *A Survey of English Dictionaries*. Russell and Russell.
- _____. 1955. The freshman and his dictionary, *College Composition and Communication* 6.
- McArthur, T. 1986a. Thematic lexicography. In Hartmann (ed.) 1986.
- _____. 1986b. *Worlds of Reference*. Cambridge UP.
- _____. 1986c. The power of words: pressure, prejudice and politics in our vocabularies and dictionaries. *World Englishes* 5 (2/3).
- McDavid, R. I. Jr. 1979. The social role of the dictionary. In A. S. Dil (ed.) 1980. *Varieties of American English*. Stanford University Press.
- _____. 1981, Webster, Mencken, and Avis: spokesmen for linguistic autonomy. *CJL / RCL* 26 (1).
- * _____. & A. R. Duckert. (eds.) 1973. *Lexicography in English*. Academy of Sciences.
- McGregor, C. 1985, From first idea to finished artefact: the general editor as chief engineer. In Illson (ed.) 1985.
- McMillan, J. B. 1978. American lexicography 1942-73, *American Speech* 53.
- Meier, H. H. 1969. Lexicography as applied linguistics. *English Stu-*

dies, vol. 50.

_____. 1979, Review of *A Supplement to the Oxford English Dictionary*. *English Studies*, Vol. 60, No. 5.

Michaelis, R. R. 1974. Dictionaries of hard words come easy. *Verbatim*, Vol. 1(1)

Mindt, D. 1982 Reviews of *Chambers Twentieth Century Dictionary* and *Chambers Universal Learners' Dictionary*, *System* 10(1).

Mitchell, T. F. 1971. Linguistic 'going-on' collocations and other lexical matters arising on the syntagmatic record. *Archivum Linguisticum* 2 (NS).

Morris, W. 1969. The making of a dictionary-1969. *College Composition and Communication* 20.

Murry, K. M. E. 1977. *Caught in the Web of Words. James A. H. Murray and the Oxford English Dictionary*. Yale UP. (加藤知己 『ことばへの情熱』三省堂, 1980)

[N]

Nguyen, D-N. 1980. Bicultural information in a bilingual dictionary. In Zgusta (ed.) 1980.

_____. 1987. How to present grammatical information in a learner's dictionary of English. In Kučera et al (eds.) 1987.

Noël, L. 1982. The inclusion of encyclopedic knowledge in the dictionary. *ABLA Papers* 6.

Nuccorini, S. 1985. Conference report : the dictionary and the language learner. Leeds 1-3 April, 1985. *Problems and Experiences in the Teaching of English* 11 (3).

[O]

Osman, N. 1965. *Word Function & Dictionary Use*. OUP.

Osselton, N. E. Lexicography ; or, the art of escaping research. *EU-RALEX Bulletin* 1(1).

_____. Dr. Johnson and the English Phrasal Verb. In Illson

(ed.) 1986c.

[P]

Pijneburg, W. & F. de Tollenaere, 1980, (eds.). *Proceedings of the Second International Round Table Conference on Historical Lexicography*. Foris. 1977年にオランダで開催された歴史辞書学学会の議事録。

Procter, P. 1976, The design of a dictionary for language teaching and learning, G. Nickel (ed.) 1976, *Proceedings of the Forth International Congress of Applied Linguistics, Vol 3*, Hochshul Verlag Stuttgart.

[Q]

Quemada, B. 1972. Lexicology and lexicography. In T. A. Sebeok et al. (eds.) 1972. *Current Trends in Linguistics*. Mouton.

Quirk, R. 1974. The image of the dictionary. In *The Linguists and the English Language*. Edward Arnold.

_____. 1976. A world of words. *TLS* 22, October 1976.

_____. 1982. Dictionaries. In *Style and Communication in the English Language*. Edward Arnold.

[R]

Read, A. W. 1962. The labeling of national and regional variation on popular dictionaries. In Householder and Saporta (eds.) 1967.

_____. 1973. Approaches to lexicography and semantics. In T. A. Sebeok et al. (eds.) 1971. *Current Trends in Linguistics*. Vol. 10. Mouton.

_____. 1974. Dictionary. *Encyclopaedia Britannica* 5.

_____. 1986a. Competing lexicographical traditions in America. In Hartmann (ed.) 1986.

_____. 1986b. The history of lexicography. In Illson (ed.) 1986.

Rey, A. 1986. Training lexicographers: some problems. In Illson (ed.) 1986c.

- Richards, J. C. 1974. Word lists: problems and prospects. *RELC Journal* V (2).
- Roberts, J. 1981. Rewriting a dictionary entry in valency dictionary format. *BALL Newsletter* 11.
- Rollins, R. M. 1980. *The Long Journey of Noah Webster*. University of Pennsylvania Press. (滝田佳子訳『ウェブスター辞書の思想』東海大学出版。1982)
- Rossner, R. 1985. The learner as lexicographer: using dictionaries in second language learning. Illson (ed.) 1985.
- [S]
- Scholfield, P. J. 1976. On a non-standard dictionary definition schema. In Hartmann. (ed.) 1979.
- Scholler, H. & U. J. Reidy. (eds.) 1973. *Lexicography and Dialect Geography*. Franz Steiner Verlag GMBH. H. Kurath 教授米寿記念論文集。24編収録。
- Schram, B. A. 1979. D is for dictionary. S is for stereotyping. In L. Stinton. (ed.) *Racism & Sexism in Children's Books*. Writers and Readers Publishing.
- Shenker, I. 1979. *Harmless Drudges*. Barnhart Books.
- Sherman, D. 1979. Retrieving lexicographic citations from a computer archive of language materials. In Hartmann. (ed.) 1979.
- Shulman, D. 1976. Antedatte dictionary citations. *Verbatim* II (4).
- Sinclair, J. McH. 1973. English lexical collocations. a study in computational linguistics. *Cahiers de Lexicologie* XXIV.
- _____. 1984. Lexicography as an academic subject. In Hartmann (ed.) 1984.
- _____, 1985, Lexicographic evidence. In Illson (ed.) 1985.
- Sledd, J. and W. R. Ebbitt, 1962. *Dictionaries and That Dictionary*.
- Scott, Forceman. Part II で Webster 3 を攻撃・擁護する論文約60編収録。これ1冊で当時の論争が手に取る様に分かる。

- Sledd, J. 1963. Lynching the lexicographers. In V. E. Garfield. (ed.) *Symposium on Language and Culture: proceedings of the 1962 annual spring meeting of the American ethnological society.*
- Smith, Collin. 1977. Bilingual lexicography as an aid to translation. *The Incorporated Linguist* 16 (3).
- Smith, R. N. 1985. Conceptual primitives in the English lexicon. *Papers in Linguistics* 18 (1).
- Snell-Hornby, M. 1986. The bilingual dictionary –victim of its own tradition. In Hartmann (ed.) 1986.
- Stanley, E. G. 1987. Old English in *the Oxford English Dictionary.* In Burchfield (ed.) 1987.
- Stein, G. 1978. The battle of words: the latest 6000. In C. Gutknecht (ed.) *Contributions to Applied Linguistics III.* Peter Lang.
- _____. 1985. Word-formation in modern English dictionaries. Illson (ed.) 1985
- Steiner, R. J. 1975. Monodirectional bilingual dictionaries. *babel* XXI (3).
- _____. 1986. The three-century English vernacular dictionaries. In Hartmann (ed.) 1986.
- Stellbrink, H-J. 1986. The art of dictionary making. *Language Monthly* October, 1986.
- Stenton, A. 1987. Decoding the information. *EFL Gazette*, No. 95.
- Stevens, P. (ed.) 1978, *In Honour of A. S. Hornby.* OUP.
- Hornby 米寿記念論文集。OALD, 英語教育と辞書関係の論文約 15 編収録。
- _____. 1987. The effectiveness of learners' dictionaries. In Burchfield (ed.) 1987.
- Stubbs, M. 1986. Language development, lexical competence and nuclear vocabulary. In *Educational Linguistics.* Basil Blackwell.
- Sundby, B. 1985. Writing a dictionary of normative grammar. In

Hyldgaard & Zettersten (eds.) 1984.

[T]

Tomaszczyk, J. 1979. Dictionaries: users and uses. *Glottodidactica*, XII.

_____, 1981. Issues and developments in bilingual pedagogical lexicography. *Applied Linguistics* 2(3).

Toon, T. E. 1981. Making a North American dictionary after Avis. *CJL/RCL* 26: 1

[U]

Underhill, A. 1980, *Use Your dictionary*. OUP.

_____, 1985. Working with the monolingual learners' dictionary. Illson (ed.) 1985.

Urdang, L. 1975. Review of *Manual of Lexicography* by L. Zgusta et al. *Language* 51.

[W]

Wakelin, M. F. 1987. The treatment of dialect in English dictionaries. In Burchfield. (ed.) 1987.

Wallece, M. J. 1979. What is an idiom? an applied linguistic approach. In Hartmann (ed.) 1979.

Warfel, H. R. 1961. Dictionaries and linguistics. *College English* 22.

Weiner, E. 1985. *The New Oxford English Dictionary*. *JEngL* 18(1).

Weinbrot, H. D. (ed.). 1972. *New Aspects of Lexicography. Literary Criticism, International History, and Social Change*. Southern Illinois University. 辞書の学問的, 批評的, 社会的役割を中世とルネッサンス, ジョンソンと18世紀, 19世紀—20世紀それ以降, の観点から見た論文9編を収録。

Weinreich, U. 1964. *Webster's third*; a critique of its semantics. *International Journal of American Linguistics* 30.

_____. 1968. Lexicology. In *Current Trends in Linguistics, Vol. I: Soviet and East European Linguistics*, ed. by T. A. Sebeok.

- Weis, E. and E. Habermann, 1978. Dictionaries in the making. *AILA Bulletin* No. 3(24).
- Wells, R. A. 1973. *Dictionaries & the Authoritarian Tradition*. Mouton.
- Whitcut, J. 1979. *Learning with LDOCE*. Longman.
- _____. 1984. Sexism in dictionaries. In Hartmann (ed.) 1984.
- _____. 1985. Usage notes in dictionaries: the needs of the learner and the native speaker. In Illson (ed.) 1985.
- Wiegand, H. E. 1984. On the structure and contents of a general theory of lexicography. In Hartmann (ed.) 1984.
- Wikberg, K. 1983. Methods in contrastive lexicology. *Applied Linguistics* 4(3).
- Williams, E. B. 1975. The problems of the lexicographical collocation of phrasal verbs. *babel* XXI(2).
- _____. 1975. The translator and the bilingual lexicographer. *babel* XXI(3).
- Wolk, A. 1972. Linguistic and social bias in *the American Heritage Dictionary*. *College English* 33.
- [Y]
- Yorkry, R. 1963. Which desk dictionary is best for foreign students? *TESOL Quarterly* 3(3).
- [Z]
- Zampolli, A. & A. Cappelli. (eds.) 1983. *The Possibilities and Limits of the Computer in Producing and Publishing Dictionaries*. *Linguistica Computazionale* Vol. III.
- 1981年にイタリアのピサで開かれたヨーロッパ科学財団ワークショップの議事録。コンピューターと辞書に関する論文20編収録。
- Zgusta, L. 1967. Multiword lexical units. *Word* 23.
- _____. 1975. Linguistics and bilingual dictionaries. *Studies in Language Learning* 1(1).
- _____. et al. 1971. *Manual of Lexicography*. Mouton. 1 言語使用

・ 2 言語使用辞書に分けてその編集のポイントを詳述。当時の（チェコを中心とする）ヨーロッパの辞書学者の協力でできた書。

_____. (ed.). 1980. *Theory and Method in Lexicography: Western and Non-Western Perspectives*. Hornbeam Press. 1978年開催の DS-NA 学会で読まれた論文(10編)と他(1編)を収録。テーマは辞書と規範, 辞書と言語構造, 辞書とコンピューター, 辞書と文化など。

_____. 1980. Some remarks on the context of lexicography. In Zgusta (ed.) 1980.

お わ り に

本文中しばしば「英米の辞書学」という言葉を用いたが、結果的には英国のそれに比重がかかりすぎてしまった。これは、滞英中(1986)英国辞書学者の何人から直接はなしを聞いたり資料の提供を受けたこと、私の関心は専ら EFL 辞書学にあったことによる。このように内容的にはかなり片よりが生じたが、少なくとも英国における EFL 辞書学事情、英和辞典記述に関連する情報はある程度まで伝え得たと思う。

英米あるいは欧米の辞書学の動向に無関心であっても英米の辞書は使えるし、立派な英和辞典は作れるのは事実である。しかし、欧米の辞書学の動向及び電算化コーパスに基づく語法研究の成果を知っているほうがより正確に英米の辞書を評価出来るし、より良い英和辞典が作れるはずである。これを実証する具体例をいくつか指摘してきたが、もう一例挙げて本稿の締めくくりとしたい。英和辞典に対する批判批評は活発であるが、書評や投稿に見られる批判は語法とか訳語とか新語の扱いにほとんど限られており、個のレベルに留まっているところに問題がある。もっと辞書記述の根幹に関わる問題(コーパスの問題は別として)が指摘されることはほとんどない。例えば、文文法に基づく 8 品詞が当然のこととして受け入れられているがそれでよいのかという議論は私の知るかぎり 1 度もなされたことがない。次の really の扱いを検討してみよう。

『グローバル』 ‘I’m going to Hawaii next week.’ ‘Oh, really?’

- 『ライトハウス』 ‘I’m going to Hawaii next week.’ ‘Oh, really?’
 『サンライズ』 ‘I’m going to Africa next month.’ ‘Oh, really?’
 『ニューアムカー』 ‘I’m going to Canada next month.’ ‘Oh, really?’

行き先、日時が変わっているが(お互い偶然一致したのもある)この用例には共通の源泉がありそうである。しかしここで問題にしたいのは用例の出処でなく、この *really* の処置である。上記辞典は全て、この *really* を

副…(間投詞的に)本当に、全くだ、まさか、おや…。

に類する扱いをしている。そして、この例文の *really* の訳も『グローバル』を除いては「へえ本当ですか(まさか)」に類するものが挙げられている。しかし、このような発話の *move* として用いられる *really* は相手の発話から次の発話を引き出すための単なるあいずちにすぎない場合が多い。Stenström (1984)⁽⁶⁾ の言葉を借りれば ‘continuer’ (つなぎ語)である。日本語の「へえ、そう」とか「ふーん、それで」に近い。文副詞でもなければ間投詞でもない。本当に驚き、意外を表す *really* と区別する必要がある(この例には、‘I’m going to the *moon* next month.’ ‘Oh, really!’ がいいだろう)。また、『サンライズ』は、上例の *really* と *Well really, you are always repeating the same mistake.* の純間投詞的な *really* を同等のものとして扱っている。しかし、いうまでもなく発話における機能の面からは両者は全く異質である。現在、ルンド大学に本部を置く「口語英語調査」の ETOS, TESS といったさまざまなプロジェクトにおいてロンドン・ルンド・コーパス (LLC) など自発的会話の電算化コーパスの分析により日常語のごくありふれた用法でありながら、従来の文法では把握できなかった用法が明らかになりつつある。このようなせっかくの研究成果も、文法・8品詞の固定観念を離れて見る余裕がなければ、正確に英和辞典に生かすことができないでなかろうか。

文献リストは最初、分散しがちなジャーナルの論文のみをまとめ、議事録など単行本は書名のみ留めるつもりであったが、一部範囲が拡大してしまった。今回見送った議事録、論文集、DSNA のジャーナル *Diction-*

aries などに所載の論文を追加した文献補遺を機会があれば出したい。

- (1) 筆者の知るかぎりでは日本でこの AHSD を正しく評価した文献は見坊豪紀『辞書をつくる』(玉川大学出版。1976。pp.212-215)のみである。ただし非性差別に関する言及はない。
- (2) 詳しくは、南出康世「語学書案内: Collins COBUILD English Dictionary」『英語教育』1987, 7. 参照。この辞書の場合、コウビルド・プロジェクトの発足が1980年だから、出版まで7年でこれも異例の速さといってよい。
- (3) ロングマン社発行の *Longman Dictionaries* には次の様に紹介されている。

ペーパーファイル	
語数	2500万
項目・用例数	50万
採集時期	1977—1982
内容	150 ジャナルに及ぶ英米の本, 新聞, ジャーナルなどとメリアム・ウェブスターの用例ファイル
ファイルの種類	ジャンル別, 語彙別, 接辞別, イディオム別, 外国語のフレーズ別, 発音別など
電算化ファイル	
語数	50万
項目・用例数	1万5千 毎月500追加 新語中心
採集時期	1985年後半以降
内容	主に1985年以降の英国の新聞・雑誌
KWIC コンコーダンス	
語数	200万語の連続テキスト
内容	最近の英米の新聞

コーパスから用例を帰納するといっても生のデータをそのまま辞書に採用出来る可能性は極めて稀であろう。編集者・インフォーマントによるなんらかの修正が必要である。これは勿論 LDOCE, COBUILD の用例にもあてはまる。

- (4) 英国では1980年の英国応用言語学会 (BALL) で, Roberts がこの理論を紹介し辞書への応用を説いている。cf. Roberts (1981)。この他辞書学への応用を説いたものに, Jackson (1977), Herbst (1987) などがある。
- (5) この辞書は A. Leonhardi & W. W. Welsh. 1966. *Grammatisches Wörterbuch*. Verlag を底本にしているようである。勿論フォーマット, 内容ともこれを凌駕しておりここにこの20年間における辞書学の進歩を窺い知ることができる。
- (6) cf. D.J. Allerton. 1982. *Valency and the English Verb*. Academic Press. pp. 68-71.
- (7) S.C. Dik. 1978. *Stepwise Lexical Decomposition*. Peter de Ridder.
- (8) A-B. Stenström. 1984. What does *really* do? Strategies in speech and writing. Paper read at the Symposium at Uppsala.